

## 5歳児の身体表現力の発達

若松 美恵子

### I はじめに

身体表現とは、見たこと、感じたこと、考えたことなど、自分のイメージを動きで自由に表現することである。これを幼児教育に位置づけることによって、次のような教育的意義がある<sup>1)</sup>。①身体がリズムカルに伸びのびと活発に動くことができるようになる。②色々な事象に興味をもち、心を通わせてみるができるようになる。③表現が豊かになり、表現することに喜びを感じるようになる。④想像や創造の喜びを経験し、想像力、創造力が養われ、工夫し遊ぶようになる。⑤友達と協力して活動できるようになり、友達とのつながりが広まったり、深くなったりする。このような教育的意義を認めながらも幼児教育の現場で指導の難しさが訴えられたり、保育者養成校において、幼児の発達段階に即した具体的指導内容、方法の提示が不十分であるなど、多くの課題がある<sup>2)</sup>。

これらの課題解決の一つとして、4歳児、5歳児の1年間の指導経過から、独自に身体表現力の変化をみていき、そこから4歳児、5歳児の身体表現の発達を明らかにする。そして、その発達段階に合った指導内容、方法を検討し、保育者養成として、幼児の身体表現に関する基礎資料を得たい。尚、4歳児については、本紀要第25号で報告したので、今回は、5歳児について報告する。

### II 研究目的

5歳児の身体表現の1年間の指導において、その身体表現力がどのように変化したかを明らかにし、そこから5歳児の身体表現の発達に関する基礎資料を得ることを目的とする。

### III 研究方法

1. 観察対象  
東京都内の私立N幼稚園の5歳児2クラス
2. 観察期間  
昭和61年4月～昭和62年3月  
昭和63年4月～平成元年3月

---

この研究は、昭和63年度文部省科学研究費補助金及び、昭和61年度白梅学園短期大学研究助成金の一部によるものである。ここに感謝の意を表します。

### 3. 手 順

園の保育計画や内容を考慮し、およそ1ヶ月に1回のペースで指導を計画した。あらかじめ、本研究者と幼稚園の教務主任、担任2名で、指導のねらいと概要について検討し、指導案作成と指導は担任が行なった。指導時には、保育室の一隅から子ども達の動き全体をVTRに収録し、録音、写真撮影も行なった。指導後には4名で反省会を行ない、記録した。記録の整理とVTRによる動きの分析から検討し明らかにする。

### 4. 身体表現の発達を明らかにするための観点

幼児の身体的、精神的、社会的な発達と幼児の身体表現の目標を考慮して、身体表現の発達を次の観点から明らかにする。

#### (1) 動 き

題材の何をとらえて、どのように動いているかを明らかにする。次の観点から顕著な変化のみ記載した。①題材のとらえ方、②身体の部位、③運動の種類、④動きのリズム、⑤空間性

#### (2) 保育者や子どもとの関わり

表現活動を活発にするには、心の開放が大切である。子ども達が、保育者とどのように関わりながら心と身体が開放されていくのか、更には、題材の探究が深まっていくのかをみる。また、子ども同士の自然な関わりからグループ表現へと発展していくので、表現の中で子ども同士がどのように関わっていくのかを明らかにする。

#### (3) 表現体になりきって動き続ける

身体表現では、そのものになりきって動くことを楽しんでできることが大切である。幼児は容易にそのものになりきるが、一方、持続性もないと考える。これらのことから、そのものになりきって動き続けているかを、指導への集中度、表現への集中度、持続時間などからみる。

## Ⅳ 結 果

本論文では、昭和61年度の結果を述べ、昭和63年度のものも参考にしながら考察しまとめる。昭和61年度の指導経過は表1の通りである。各指導の身体表現力の特徴は次の通りである。

### (1) 蝶

#### 1) 動 き

各人が自分の動きを見つけ、子ども間に動きの多様性がみられる。蝶の変態の様子を、形や動き方の特徴をとらえて、細部まで動きで表現しようとしている。すなわち、「さなぎの殻を破り蝶の誕生」では、上体、上肢、あるいは全身でゆっくり、ソーッと動こうとし、漸次的動きで脱皮の様子を表現している。又、「初めて飛ぶ」では、つま先から足首、膝の屈伸をしながら、ソーッとゆっくり歩き、上肢は、肩から肘、手首を大きくゆっくり動かすなどして、蝶が初めて飛ぶ弱々しさ、心もとなさを表していた。これらの表現では、体幹の動きとの関連で、上下肢の微妙な動きがみられた。動きのリズムは「ゆっくり、速い、だんだん速い」など表現内容に応じて速さの変化がみられた。空間の使い方

表 1. 指導経過（昭和61年度，N幼稚園，5 歳児）

| 題 材     | ね ら い  | 実施日<br>時 間   |
|---------|--|--------------|
| 蝶       | 蝶の変態の特徴をつかんで身体で表現する<br>走る・回る・跳ぶの一連の動きを精一杯行なう                         | 4.26<br>15分間 |
| 伸びる・縮む  | 色々な方向に全身で伸縮をできるようにする<br>前にやったことのない動きをみつける                            | 5.24<br>35分間 |
| 宇宙探険    | 性質の異なる動きを体験する<br>空想の世界で遊ぶことを楽しむ                                      | 6.27<br>20分間 |
| 新聞紙     | 新聞紙で色々な遊びを楽しむ<br>色々な種類の運動を極限まで行なう                                    | 9.27<br>40分間 |
| さる・かに合戦 | 表現題材の特徴をとらえ、大胆に表現する<br>グループの友達と協力して表現する                              | 10.29<br>1時間 |
| 音       | 音のリズムの特徴をとらえ、全身でのびのびと表現し続ける<br>グループの友達と表現する面白さを味わう<br>友達の発表に興味をもって見る | 2.21<br>1時間  |
| おもちゃ箱   | そのものの特徴をとらえなりきってのびのびと表現する<br>複数の動きを連続させ、くり返し行なう<br>友達の発表を鑑賞する        | 2.21<br>55分間 |
| クレヨンの冒険 | 絵からうけるイメージを身体で表現する<br>大きくダイナミックに動く                                   | 3.11<br>20分間 |

は、広く部屋一杯に広がり、内容によっては、柱、机の下なども使ってなりきっていた。

## 2) 保育者や子どもとの関わり

子ども達は、保育者の言葉がけに注目し、よく反応しながら動くが、保育者の周辺に限らず、各自が思い思いの場で動く。子ども達の多くは個人で動いているが、中には友達同士意識して、つかず離れずの関係で動いているのが1組、そして2人で手をつなぎ、あいっている片方の上肢で羽の動きをしながら走っているのが1組いた。

## 3) 表現体になりきって動き続ける

指導全体を通して、ほとんどの子どもが一貫してそのものになりきっていた。特に「蝶の誕生」や「蝶が初めて飛ぶ」などの静的で微細な表現では、指先や顔の表情までなりきって、丁寧に表現していた。場の移動を伴った動きでもただ走り回る子はいない。上肢で羽の動きを表しながら走・跳躍を行なう。時々友達とぶつかったり、ぶつかりそうになると一時動きが途切れて、上肢は走の腕の振りになるが、2～3秒すると再び羽の動きになる。又、6分ぐらいのストーリープレイでは、子ども1人ひとりで表現したが、気持ちを維持し、そのものになりきって動きを楽しんでいた。

## (2) 伸びる・縮む

### 1) 動き

前半の指導では、「伸・縮」の課題に方向や高低の指示があったので、指示の方向へ動

きを工夫して伸びたり、縮んだりしていた。「色々な方向へ伸びる」の「上へ伸びる」では、上肢を上へ伸ばし、バンザイの形がほとんどであったが、片足立ちの左右非対称の形のものもあった。「横へ伸びる」では、立位で上肢を横に伸ばすがほとんどであるが、高低の違いがあったり、更には、左右非対称のポーズも6名いた。「伸びる・縮む」では、上に伸びると下に縮むがほとんどであるが、縮むに方向や形の違いがみられた。これらの動きの体の動かし方は、体幹はまっすぐで上下肢から動くのと、体幹から上下肢一体で動くのが半々であったが、全体的に動きが伸びのびと極限まで動く感があった。題材が「伸縮」であったので、運動は「伸縮」の反復であったが、方向や高低に変化が少しずつみられ、子ども間に多様性がみられる。「伸縮」の動きの速さの変化をつけた指導では、どれもその課題の通りに動いていたが、「ゆっくり伸びる」「ゆっくり縮む」では、漸次的に動くことはしても、その空間の軌跡は直線的で、指導しても大きく遠まわりして曲線の軌跡をもって動くことはなかった。動きの空間は、体を中心にして上下、前後、左右にと広く動き、又、部屋一杯に広がって動いていた。

## 2) 保育者や子どもとの関わり

保育者の言葉がけにより個人で動くが主であったが、後半、保育者の援助により1クラス単位でまとまった表現をした。それは、保育者からの働きかけや方向づけはあったが、子ども達の考えを引き出し、自由に動かせ、一応クラスとしてのまとめをするというものであった。その中で子ども達は自由に意見を言い、動き、その自由さの中でクラス全体としてまとまった表現をすることを体験した。

## 3) 表現体になりきって動き続ける

前半の「色々な方向に伸縮」では、大変良く集中し、考え、工夫しながら動いていた。後半の「ゆっくり・速く伸縮」では、指導時間も長くなってきたためか、時々だらけて友達の動きを眺めている子も2~3人みられた。クラス単位の創作・発表は、演ずる時、表現体になりきっていたのだが、何を表現しているのか当てられると動きが終わってしまい、次第に当てられることが気になり、十分集中しきれないことも終わりの方であった。

## (3) 宇宙探険

### 1) 動き

題材が実在しない空想上の「氷の星、火の星、風の星、宇宙怪獣のいる星」への探険であったので、想像しながらの表現であった。「氷の星」で「滑る」では、上肢を大きく振動させ、全身で大きくリズムを作って、大きなスケータリングの動きが多くみられた。又、「体が凍る」では、首、上下肢、手先、体幹と全身のどこもかしこも硬直させて、ゆっくりぎこちなく歩くのが多くみられた。これらの動きは、どれも体幹と上下肢一体となったものであった。「風の星」で「風にとばされる」では、走一跳躍一回転など高低の変化に富んだ動的な一連の動きもみられるようになり、又、保育者の擬音により、回転一跳躍の一連の動きの反復も多くの子どもにみられるようになった。これらの表現では、各自がゆっくり、速く動いたり、更には、一連の動きにもゆっくりから速くなどテンポの変化がみられ、動きにリズムが感じられた。空間は、部屋一杯広く使い、又、一連の動きも高低の変化に富んでいた。

## 2) 保育者や子どもとの関わり

特にグループ活動はなく、保育者の言葉がけと子どもとの応答の中で個人で動いていた。個人の動きの中でも周りの友達と関わりながら動いている子もいたが、ふざけに発展することはなかった。

## 3) 表現体になりきって動き続ける

空想の世界で遊ぶのが楽しいらしく、声を発しながら表現に集中していた。しかし、「宇宙怪獣のいる星」では少し内容が理解できないらしく、思いきった自分の動きができていない子も数名いた。

## (4) 新聞紙

## 1) 動き

新聞紙の色々な状態を細部にわたってよくとらえ、形、重さ、動きなどの違いや変化を表現しようとしていた。それは屈曲した体幹の動きや全身の動きによってであった。動きの種類は、走一跳躍一回転など高低の変化に富んだ動的な一連の動きと、回転一跳躍など連続した2種類の運動の反復により動きにメリハリができ、表現したいことをより強調して表現するようになった。表現内容によっては小刻みに速く動いたり、体を曲線的に使い、つま先から弾力的に着地して、フワッとした感じを表すなど、全身の動きの速さのコントロールが上手になり、動きがよりリズムカルになり変化に富むようになった。空間は部屋一杯に使い、又、高低の変化にも富んでいた。

## 2) 保育者や子どもとの関わり

保育者の誘導のための言葉がけをよく聞き、各人が自由に動いた。特にグループ表現はなかったが、個人々々自由に動く中、2～3人での表現を自然発生的に自由に行なうのがみられた。

## 3) 表現体になりきって動き続ける

新聞紙で遊んだり、新聞紙の様々な状態を表現したが、その都度、保育者の誘導の言葉がけを良く聞き、すぐ動きだし、次の言葉がけまで40秒～1分ぐらいよく集中して表現していた。中には「フワッ」「ビリビリ」など自分で擬音を発しながらなりきって動く子もいた。

## (5) さる・かに合戦

## 1) 動き

保育者のナレーションによって物語が展開し、子ども達は配役に応じて表現するであった。従って動きを引き出し、高めるための保育者の言葉がけは特はない。その中で、子ども達は登場する「川、猿、カニ、柿、栗、蜂、ふん、臼、火、水がめ」の形や動きの特徴を各人一つとらえて表現するであった。動きの内容は、全体的には体幹の屈曲した動きや、高低やリズムの変化に富んだダイナミックな動きは少なめであった。しかし、各々の役の特徴をきちんととらえ、体幹から大きく全身的な動きで表し、速さの変化をつけたり、力感に強弱をつけたりして、個性的に表現していた。空間は、部屋一杯に広がり、自分の役を楽しんでいた。

## 2) 保育者や子どもとの関わり

保育者のナレーションに従い、演ずる子と鑑賞する子に分かれ、交代して行なった。発表会形式だったので、演ずる時は友達とふざけることもなく一生懸命表現している。又、役柄上、友達と2人組んで大きな水がめを力強く協力して表現するなど、他の役との関わりを動きで楽しんでいた。鑑賞している子ども達は、動きを見ながら歓声をあげたり、感想を言葉に出している。

3) 表現体になりきって動き続ける

ストーリープレイの発表であったが、発表中、舞台に出ている間は、自分が演じる時、及び、他の人が演じる時でも終始その役になりきり、表現を楽しんでいた。

(6) 音

1) 動き

前半の、音からのイメージで自由に動くでは、楽器の音を聞くとイメージした事をすぐ言葉で表し、音を聞きながら自由に動いた。そのとらえ方は次の通りであった。①音から連想した物の形や動きの特徴をとらえて動く。②音の響きや感じをそのまま動きにする。例えば、最初の「大太鼓」では、両脚、両腕を横に一杯に広げて大きく跳躍して、その大きさを表している。又、子ども達は「雷・ライオン、お坊さん、鐘、地震」などをイメージし、そこから「打」をイメージして打つ動作を反復した後に走りすべり込む動きをしたり、大きく跳躍した後に転がるなどして雷が落ちる様子を表している。「鉄琴」では、「バレリーナ・オルゴール人形」などをイメージして、両手を広げて片足で回ることを反復したり、両手を横に広げて波動をした後に回転したりして表現している。「ビブラスラップ」では、「蛙、電話」などをイメージし、カエル跳びをしながら1回転したり、下肢や上肢を振動させながら跳躍している。これらの動きは、2種類の複合的な運動の反復であったり、子ども間に多様性もみられる。又、楽器の音のリズムに影響されたのか、動きにリズムが感じられる。グループ創作では、隊形の工夫がみられ、異なった動きの組み合わせがみられ、動きにリズムが感じられた。

2) 保育者や子どもとの関わり

自由な表現の時から2・3人組んで表現するのが5・6組みられた。3～8名までのグループ創作活動をして発表するまでに至った。その過程は、全く援助なくすぐ動き出し、くり返し動きの練習をするグループもあれば、保育者の働きかけによって創作が進んだグループもあるというように様々であった。グループ創作の中で、隊形の工夫、異なった動きのハーモニーを工夫しているものもあった。

3) 表現体になりきって動き続ける

前半の自由な表現の時は、ほとんどの子どもは、大きな歓声や擬音を発しながら楽しんで動き続けていたが、1割弱の子どもがイメージがわからないのか、又、音と歓声に圧倒されたのか、十分表現できずに立っていることが少しあった。グループ創作の発表時は、集中して動き続け、又よく鑑賞していた。

(7) おもちゃ箱

1) 動き

おもちゃの形や動きの特徴を各自一つとらえて反復する。その動きは、子ども間で多様

であり、題材のとらえ方が豊かで、イメージの広がりがみられた。例えば、「自動車」の表現では、四つんばいで動くもの、長座で表すもの、2人組で低い姿勢で馬乗りになるもの、2人立位で低い姿勢で連なるものと、特に保育者の言葉がけがなくとも、色々なイメージで多様な表現がみられる。しかし、題材がおもちゃであったので、なりきって動いても体幹の屈曲した動きや体幹の動きと一体となった微細な上肢の動きは少なめであった。しかし、多種多様な動きがみられ、個人、グループとも、空間における高低の広がりがみられた。又、「ロボットがぎこちなく動く」などのように感じをとらえた一連の動きのくり返しもみられ、動きにリズムが感じられた。そして、保育者の伴奏にのって動きながらも、独自の速さやリズムで動いている子もみられる。グループ表現では、2人、3人、4人、7人のグループがみられた。動きは1～2種類の動きを反復するであるが、各人が自分の役を演じ、そしてグループで一つのものを表そうとしていた。

## 2) 保育者や子どもとの関わり



個人の自由な表現において、個人のみならず、クラスの1/3ぐらいは自主的に2～3人組んで表現しており、又、ふざけることもなかった。グループ創作の時、衝突もあったが、役決めをしたり工夫してグループ表現をしていた。保育者は、自由な表現の時は、全体を巡回して承認や賞賛を、グループ創作の時は、グループ内に出た動きの定着に務め、子ども同士の関わりが大であった。発表時は、保育者が運営したが、発表している間はどちらもよく集中し、発表後は感想など意見が多く出た。

## 3) 表現体になりきって動き続ける

個人の自由な表現では、一つの題材について動く時間が40秒～1分間ぐらいと短かったので、題材が提示されるとすぐなりきって動き続けていた。グループ創作の時は、他のグループが気になって時々みることや、意見の調整がうまくいかず、各人別々に動くことが中にはあった。しかしおおむねくり返し動いて練習し、発表時もきちんと始めから終わりまで動いていた。

## (8) クレヨンの冒険

### 1) 動き

題材は、紙に描かれた線や絵であったが、その形や勢いを全身の活発な動きで表現し、その動きは子ども間で非常に多様であった。それらの動きは、例えば、「クルンクルン 」では、回転が多かったが、上半身で高低の変化をつけながら自転しつつ移動したり、立位で片足立ちで速くクルッと回ったり、床上で前転したり、両足跳びで自転したり、上肢を伸ばし、上半身とともに大きく同方向に回旋したり、床上で後転の途中までゴロンとしたりと、他、回旋、回転などの多様な動きが出た。又「ポツポツポツ 」では、ベタベタと音をたて、両足跳びで色々な場所へ移動したり、全身を震わしながら速く足踏みをした後、両足跳びをくり返したり、上肢を震動させながら跳躍したり、全身で斜めに体を伸ばしながら跳躍するなど、跳躍、振動、回転などの多様な動きが出た。又、更には、走一跳躍一回転などダイナミックな一連の動きや、跳躍しながら回転などの2種類の複合的な動きなど、場の移動、高低の変化の多いダイナミックな全身的な動きが様々みられた。そして絵や線のもつリズムでリズムカルに動いていた。

### 2) 保育者や子どもとの関わり

保育者の言葉がけに注目しながら、各自で自由に広がって動き、楽しんでいた。絵から表現する時は、1人ひとり動きつつも、自由に2～3名や5～6名でまとまって表現したり、関わりつつ動いていた。

3) 表現体になりきって動き続ける

指導中、保育者によく集中し、かつ、言葉や擬音を発したりしながらすぐ表現する。そして保育者の合図があるまでなりきって動き続ける。

## V 考 察

これまで、各指導ごとの身体表現力の特徴を3つの観点から順次述べてきた。これらから各観点ごとに検討を加え、5歳児の身体表現力の発達について次のようにまとめた。

### (1) 動 き

4月の「蝶」では、題材の細かな変化を体幹の動きとの関連で、上下肢の微妙な動きや動きの速さの変化で表そうとしていた(写真1)。5月末の「伸縮」では、色々な方向に伸びる縮むの指導により、次第に体幹と上下肢が一体となった極限まで伸びる全身での大きな動きになりつつある(写真2)。又、速さの変化をつけた動きもできるが、直線の軌跡をもってゆっくり動くことはできても、曲線の軌跡をもって大きくゆっくり動くことはまだできない。

6月末の「宇宙探検」や9月の「新聞紙」では、題材の細かな質的变化をもとらえ、体幹から動き、身体の各部位をよく動かして表現する。又、指導により、「宇宙探検」では、走一跳躍、回転一跳躍などの連続した運動の反復がみられ、更に全身的、動的な動きにおいて速さをコントロールし、題材の質的違いや変化も表現できるようになってきた(写真3)。これらの動的表現では空間を広く使い、又、高低の変化にも富んでいた。

10月末の「さる・かに合戦」では、ストーリープレイによる発表・鑑賞であったので、他の指導ほど微細な表現やダイナミックな表現には乏しかった。それは動きを引き出し高めるための保育者の言葉がけが少ないということと、指導性よりもお話を進行させるということに力点がおかれている為と思われる。又、子どもは、一斉に動いている時は声を発しながら伸びのびと動くが、役が決まり、自分だけが氣勢に注目されている中で動く時は、動きも少なく硬くなる。

1月の「音」と2月の「おもちゃ箱」、3月の「クレヨンの冒険」では、具体的に形のない抽象的なものもとらえ表現している。動きは、跳躍しながら回転するなど、2種類の複合的な運動の反復や、走+跳躍+回転などダイナミックな一連の動きや、又、回転+跳躍などの連続した2種類の運動の反復もみられ、動きの空間が広がり、リズムカルでダイナミックになり、子ども間に多様性が更に増してきた(写真4)。又、グループ創作において、異なった動きの組み合わせや、隊形の工夫もするようになった(写真5)。

### (2) 保育者や子どもの関わり

4～6月では、保育者の言葉がけに集中して聞き、個人ですぐ動く。そして、保育者の援助により、1クラス単位のまとまった表現に参加するようになる。発表・鑑賞しあうと



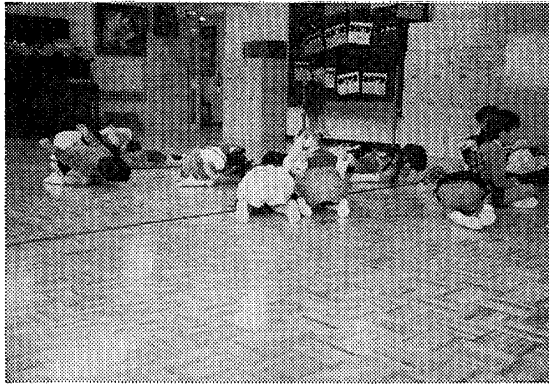


写真1 「上下肢の微妙な動き」

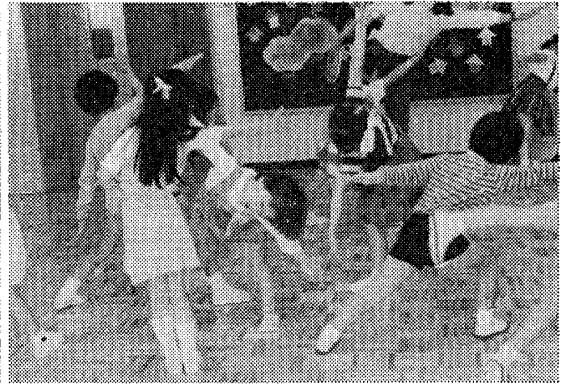


写真2 「極根まで伸びる」

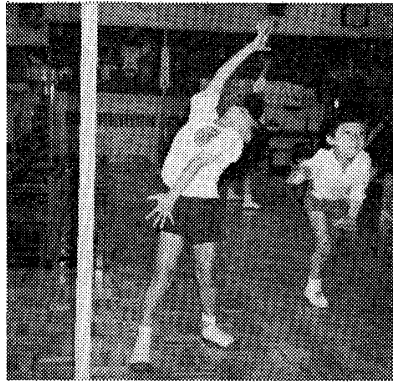
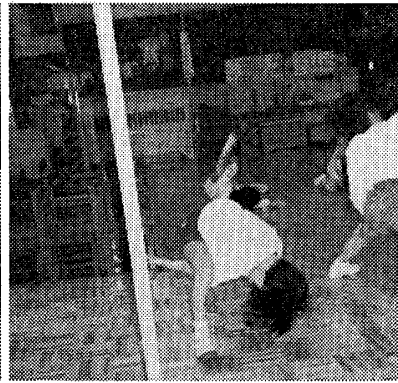


写真2 「伸びる」



「縮む」



写真3 「全身的な動的動き」



写真4 「ダイナミックな一連の動き」



写真5 「異なった動きの組み合わせ」

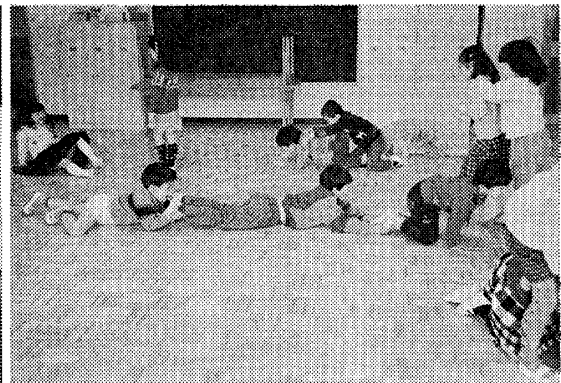


写真5 「隊形の工夫」

いうよりは、何を表現しているか当てっこの感があり、そのことを楽しんでいる。7～11月では、保育者の言葉がけを聞きながら個人々々でよく動いていたが、個人で動く中、自由に2～3人での表現を楽しんで行っていた。又、発表・鑑賞も一応区別して行なわれ、発表では、動きながら役の上で友達との関わりを楽しんでいた。鑑賞では、気がついたこと、感想、解説を口にしながらも集中してできていた。1～3月では、個人の自由な表現の時でも個人のみならず、自主的に2～6人組んで動いていた。2～3名から7名ぐらいのグループ創作活動も行ない、相談して役決めや動きの工夫もできていた。

### (3) 表現体になりきって動き続ける

4～6月では、指導を通してよくそのものになりきって動いていた。しかし、指導が長すぎたり、ぶつかったりすると一時中断することも時々ある。しかし、すぐに表現に戻る。又、表現体になりきっている時、比較的静的な動きでは、細かな変化を丁寧に気持ちを入れて表現しようとし、顔の表情も変わり、身体の部位を細かに動かそうとする。7～11月では、自分も表現する時は声を発し、又、擬音なども自分で言いながら表現に集中していた。しかし、表現内容を十分に把握できていないものでは動きが中断する子どもが少しいた。発表形式でストーリープレイを演じる時もよくその役柄になりきって表現し、他の役の子どもが中心に表現している間も、そのものになりきってポーズをしたり、動き続けたりしている。1～3月では、自由に表現する時は一部を除いて歓声や擬音を発しながらそのものになりきって動き続けた。グループ創作の発表時も終始表現体になりきって動き続けていた。

## Ⅵ 結 論

以上の昭和61年度の結果から各観点ごとに発達について述べたが、昭和63年度のものも参考にして5歳児の身体表現力の発達の特徴をまとめたものが表2である。すなわち、1年間の発達はおおまかであるがおよそ3期に分けられるとの見解が得られた。

### I 期 (4月から6月まで)

- (1) 題材の細かな変化を体幹の動きとの関連で上下肢の微妙な動きで表そうとする。
- (2) 次第に体幹と上下肢が一体となった全身での大きな動きになりつつある。
- (3) 直線的軌跡をもってゆっくり動くことはできても曲線的軌跡をもって大きく、ゆっくり動くにはまだ至らない。
- (4) 保育者に注目しながら部屋一杯に広がり、思い思いの場で落ちついて表現する。一部の仲良しが一時的にくっつき、表現が十分でないことがあるが、ふざけることはない。
- (5) 終始表現体になりきって動くことを楽しむ。

### Ⅱ 期 (6月末頃～12月頃まで)

- (1) 題材の色々な変化を、体幹から動くことにより大きく伸びのび全身で表現する。
- (2) 指導により、高低の変化に富んだ動的な一連の動きや、回転と跳躍などの一連の動きの反復がみられるようになり、より感じをとらえた個性的な表現となる。

表 2. 5 歳児の身体表現力の発達

|                        |   | I   | II   | III   |
|------------------------|---|---|--|---|
| 動                      | 題材の<br>とらえ方   | 題材の細かな変化(形態)<br>をとらえる   | 題材の細かな変化(質)を<br>とらえる   | 目に見えないものや抽象的<br>なものをとらえる  |
|                        | 身体<br>の<br>部位   | 体幹の動きとの関連で上下<br>肢が微妙に動く   | 体幹から大きく伸びのび全<br>身で動く   | 体幹から大きく、ダイナミ<br>ックに全身的に動く   |
|                        | 運 動   | 単一の運動の反復が多い<br>子ども間に多様性がみられ<br>る<br>異なった2種類の運動の連<br>続による表現もみられる | 高低の変化に富んだ動的な<br>一連の動きや、回転・跳躍<br>などの一連の動きの反復が<br>みられるようになる                            | 2種類の複合的運動の反<br>復、2, 3種類の一連の運<br>動や連続した2種類の運動<br>の反復もみられるようにな<br>る |
|                        | リズム   | 漸次的動きがみられる<br>表現内容を動きの遅・速の<br>変化で多くの子どもが表す                      | 全身的な動きの速さのコン<br>トロールができるようにな<br>り動きがリズムカルになる   | 短な、一連の動きの反復に<br>よりリズムパターンのある<br>動きがみられるようになる                      |
|                        | 空 間   | 漸次的動きは直線の軌跡を<br>もって動き、曲線の軌跡を<br>もって大きく動くことはな<br>い<br>空間を広く使う    | 部屋一杯に広がり、又一連<br>の動きも高低の変化に富<br>む   | 場の移動、高低の変化も多<br>くダイナミックに動く  |
| 保育者や子<br>どもとの関<br>わり   | 保育者の言葉がけに反応し<br>ながら動く<br>保育者の援助により、1ク<br>ラス単位まとまった表現に<br>参加する | 保育者の言葉がけに反応し<br>ながら動く<br>個人で動く中自由に2~3<br>人での表現を楽しむ              | 自由に表現の時から2~3<br>名や5~6名で表現するの<br>がみられる<br>グループ創作活動もでき、<br>異なった動きの組み合わせ<br>や隊形の工夫がみられる |   |
| 表現体にな<br>りきって動<br>き続ける | すぐ表現体になりきり動く<br>細かな変化に気がつき、丁<br>寧に気持ちを入れて表現し<br>ようとする         | 声を発しながら表現に集中<br>する<br>表現内容を十分把握できて<br>いないものは集中に欠ける              | 指導中を通して保育者によく<br>集中し、かつ声を出しなが<br>ら活発に動き続ける   |   |

- (3) 全身的な動きの速さのコントロールができるようになり、動きがよりリズムカルになり変化に富む。
- (4) 空間を広く使い、個人々々で動くのが主であるが、動きの中で周りの友達と関わり2~3人での表現を楽しむ。
- (5) 声を出しながら、集中して表現体になりきって動くが、表現内容がよく理解できなかった部分では、思いきった動きができていない。
- (6) ストーリープレイとしての発表の場でも、表現体になりきって動き続け、役の上で友達との関わりを楽しむ。

### Ⅲ 期(1月~3月まで)

- (1) 題材の形、動き、性質など、更に抽象的なものも色々な角度から各自でとらえて、すぐ活発に声も出しながら動く。

- (2) 2種類の複合的運動の反復, 2, 3種類の一連の運動や, 連続した2種類の運動の反復などにより, 動きの空間が広がり, リズミカルになり, 更にダイナミックな動きになり『より感じをとらえた1人ひとりの個性的な動き』の感が強くなる。
- (3) 自由な表現の時, 1人のみならず, 2~3人で臨機応変に動く。又, グループ創作活動もでき, 異なった動きの組み合わせや隊形の工夫がみられる。
- (4) 指導中, よく保育者に集中し, かつ声を出しながら自由に伸びのび活発に動き続ける。

## Ⅶ おわりに

4歳児の指導を継続しての5歳児の指導であった。4歳児では, 題材からイメージが次第に広がり, そのものになりきって表現ができるようになり, 身体表現を楽しんで行なえるようになる土台ができたと言えるだろう。その上に立っての5歳児の指導では, 子ども達の知的, 情緒的, 社会的な発達と, 身体の調整力の発達という運動面の発達とが相まって, 身体表現力の著しい発達がみられた。

### 参 考 文 献

- 1) 若松美恵子 (1981), 保育者養成としての身体による自由表現の指導法研究——その基本的考えと問題提起——, 白梅学園短期大学紀要, 第17号
- 2) 若松美恵子 (1979), 動きのリズム指導の現状と問題点, 舞踊学第2号, 舞踊学会, 6-12
- 3) 太田信夫 (1979), 子どもの発達と模倣・創造, 体育科教育, 大修館書店
- 4) 内田伸子 (1986), ごっこからファンタジーへ——子どもの想像世界——, 新曜社

わかまつ みえこ (体育学)